

類似経験の有無が金銭的援助行動に与える影響

河西 映紀

日常において寄付を行うとき、寄付相手は「自分はしたことのない経験をしている相手」と「自分もしたことのある経験をしている相手」の場合がある。つまり、類似経験が有ることと無いことのどちらも、援助行動の動機になりうる。本研究では、類似経験の有無が金銭的な援助行動に与える影響を検証することを目的とする。

先行研究をもとに次の2つの仮説を立てた。

仮説 1: コロナ禍により金銭的損失を受けた調査対象者は、コロナ禍により損失を受けた刺激人物に対して、援助行動が促進される(分配率が増加する)。

仮説 2: コロナ禍により損失を受けた調査対象者は、視点取得の傾向が強い場合、コロナ禍により損失を受けた刺激人物に対しかえって利己的行動を促進させ、刺激人物への援助行動が抑制される(分配率が低減する)。

実験 1 では仮説 1, 2 を検証するために、質問紙調査を行った。調査対象者がコロナ禍により受けた金銭的損失の程度を聞いたのち、自ら望外に入手した1万円のうち刺激人物に対して何%分配するかを答えさせた。その後、各刺激人物の置かれた状況に対する類似経験の有無、視点取得の個人特性、年齢・性別などの個人属性を答えさせた。分散分析および階層線形モデルによる分析の結果、仮説 1 が部分的に支持され、仮説 2 は支持されなかった。分配率は調査対象者が受けた金銭的損失の程度と刺激人物の種類によって影響を受け、刺激人物の損失の原因がコロナ禍である場合に分配率が高く、かつ刺激人物の損失が大きい場合に特に分配率が高いことが分かった。

実験 1 の結果から、調査対象者が、損失の有無に関わらず「コロナ禍」という状況を経験したことによって、コロナ禍により損失を受けた刺激人物に対する援助行動が促進されたのではないかと考え、追加の検証として以下の仮説を立てた。

仮説 3: 刺激人物の置かれた状況に対する類似経験があることにより、援助行動が促進される(分配率が増加する)。

実験 2 では、実験 1 で得られた改善点を踏まえて仮説 3 を検証するために、刺激人物を変えて実験 1 と同様の分配課題を行った後、各刺激人物の置かれた状況に対する類似経験の有無、共感性の個人特性、個人属性を答えさせる質問紙調査を行った。

分析の結果、刺激人物の状況に対する類似経験の程度による分配率への影響は有意でなく、仮説 3 は支持されなかった。しかし探索的に刺激人物ごとに分配率に対する類似経験の影響を分析すると、刺激人物 N にのみ、類似経験の程度の高さにより分配率が促進される傾向が見られた。

今後の研究では、状況間において類似経験の程度がより均等になるような刺激人物を設定した上での再調査や、より具体的な経験の特徴が分配率に与える影響の検証、実際場面における実験結果の適応の検証を行い、類似経験が援助行動に与える影響について検証を進めていくことが望ましい。(社会心理学)